2024年4月21日

説教題「希望の言葉」ヨハネによる福音書９章１～12節

主任牧師　加藤　誠

「イエスはお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」（ヨハネ福音書9章3節）

その昔、「自然災害は神の怒りによるもの」と大真面目で信じられていた時代、「子どもが生まれない」「重い病気を背負って生まれた」のは、神の怒りを引き起こすような罪を親が犯したから…という考えが、根深く人々の間に浸透していました。そのために、多くの人びとが深く心を傷つけられ、無用な重荷を背負わされ、悲しみを強いられていました。そのような私たち人間の「思い違い」を主イエスがただされ、神の愛と希望の光の下に歩む幸いを教えてくださったのが、今朝のヨハネ９章です。

ここで、生まれつき目の見えない盲人を見かけられた主イエスは、地面の土に唾をしてこの人の瞼の上に塗り「シロアムの池に行って洗いなさい」と命じられていますが、「あなたは癒される」とは一言も言われていません。この男の人にすれば、いきなり「顔に泥を塗られた」のです。けっして気持ちの良いことではないはずなのに、なぜこの人は素直に従えたのでしょうか？　一つ思い至ったのは、この人は直前の主イエスと弟子たちの会話を聞いていたのではないかということです。

その日、この人はいつものように道端に座り、物乞いをしていました。目の見えない彼は、道を行き交う人々の足音を聞き、そこで交わされる会話を聞いていたことでしょう。目の見えない方は耳ですべて必要な情報を得るために小さな音もしっかりと聞き分ける力を持っておられます。きっと足音だけで誰の足音か分かったことでしょう。その彼の耳に、その日、聞きなれない声の会話が飛び込んできました。「ラビ（先生）、この人が生まれつき目が見えないのは…」。あぁ、また始まった。他人の罪をあれこれ詮索して決めつける人々の無責任な言葉が…。ところが、その問いに対する答えは、それまで彼が一度も耳にしたことのない、天地がひっくり返るような言葉でした。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。「何だって？この俺は神に見捨てられ、呪われた運命に定められているのではないのか？神がこの俺の人生に何かを期待し、神の業を計画してくださっているだって？」。この人は電流に打たれたような衝撃を覚え、その心に一筋の光が明るく射すのを感じたことでしょう。「この方はいったいどなたなのだろう？」。そして、その声が彼に近づき「シロアムの池に行って洗いなさい」と告げたのです。彼はその言葉を「神から遣わされた方」の言葉として聴いたのでした。そして彼がその言葉に聴き従った時、彼の人生は暗闇の中から神の慈しみの光のもとに移されて、世の光である主イエスの愛の光に照らされて歩む者に変えられたのです。

アフガニスタンで人々と共に働き、褐色に荒れ果てた大地を緑の大地に変える働きをした中村哲さんにバプテスマを授けた藤井健児牧師（連盟香住ケ丘教会）という方がおられます。先生は、小学校入学を目前にしていた時に、猛スピードで突っ込んできた自転車にはねられて左目を失明し、一年遅れで盲学校小学部に入学します。見える右目を生かし、盲学校の教師になることを志して東京教育大付属盲学校高等部に進学しますが、卒業目前にとうとう右目の視力も失われてしまいます。深い失意に沈み、自死も考えられたそうです。その時に近くの教会の小学科の子どもたちが花の日に讃美歌を歌いに来てくれて、「讃美歌をちょっと聞いてみようかな」と思って出かけた教会で「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」という御言葉と出会ったのでした。「わたしは肉の目の光を失い、信仰による光を得ました」。そして家族や友人たちの反対を押して西南学院大学神学部で学び、主イエスに従い、牧師として生涯をささげられました。その藤井先生が神学校を卒業して始めた小さな教会に 15 歳の中村哲少年が礼拝に通うようになり、「目の悪い藤井先生が人々に仕えているように、僕も人々に仕える仕事をしていきたい」と医者の道を志すようになったのだそうです。その後、数十年にわたって、まさに主イエスが語られた「神の御業がこの人の上に現れるようになるため」の御言葉が、藤井先生の人生に、そして中村哲さんの人生に実現していったのでした。

主イエスがこの 9 章で、生まれつき目の見えない人の前で「それは神の御業が現れるためである」と宣言された時、世界は変えられたのです。9 章後半で、この男の周りにいた人々は「お前は罪にまみれて生まれながら俺たちに教えようとするのか！」と食ってかかりました。「生まれながら目が見えないこと」を「罪にまみれて生まれた」と決めつけた言葉です。なんという愚かな思い違いでしょうか。でもそれが当時の「常識」でした。主イエスはその人々の前に立ちはがかるようにして言われます。「自分は見えていると言うあなたたちこそ、実は見えていない。自分は見えると言い張るところに、あなたたちの罪がある」と。「生まれながら目が見えない」ことを引き起こすような「罪」は存在しない。そんな「罪」はない。むしろ、神さまが一人ひとりの注がれている愛を「阻むこと」こそが、神さまの悲しまれる「罪」だ。他人の「罪」を周囲が勝手に詮索して決めつけ、その尊厳を深く傷つけるようなことはもう止めよう。そうではなく、神がその人の上に現わされる「神の愛の御業」を一緒に見上げて生きていこう。主イエスの言葉は、人の心を傷つけ、引き裂く「罪」から私たちを解放し、互いの尊厳を受け止めあう「愛の歩み」に私たちを導く「希望の言葉」です。この主イエスによって、暗闇が支配する世界は、希望の光のもとに移されたのです。

この主イエスの「希望の言葉」を共に分かち合い、一人ひとりの上にご自身の御業を現わしてくださる神を共に賛美して歩んでいきましょう。